

もし、一日前に戻れたら…

私たち（被災者）からみなさんに伝えたいこと

— 『いち にち まえ一日前プロジェクト』 エピソード集 —

平成26年3月

目 次

I . 一日前プロジェクトの概要 P1

II . 平成 25 年度実施要領 P2

III . 一日前プロジェクトのエピソードについて P3

平成 25 年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧 P5

〔編集後記〕

一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？ P60

I. 一日前プロジェクトの概要

■「一日前プロジェクト」とは？

「一日前プロジェクト」とは、被災から一定期間を経過した被災者・災害体験者のみなさまや災害対応経験者のみなさまにお集まりいただいて、「もし、災害の1日前にもどることができたら、あなたは何をしますか」をテーマに、

- ① 被災直後の行動
- ② 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- ③ もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- ④ そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー（エピソード）に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

■「一日前プロジェクト」誕生の背景

わが国の経済を支える壮年層は、日々の仕事に追われ、防災教育を受講する機会や防災に関する情報に接することも少ないため、自然災害の恐ろしさを意識することなく日常生活を送っています。しかしながら、万一、大きな災害に見舞われた場合には、家屋の損壊や家族の死傷、仕事を含めた生活基盤の喪失など、経済的にも精神的にも甚大な損失を被ることが予想されています。

教育課程にある若年層の防災教育もまだ十分とは言えませんが、これら壮年層に対する防災教育の仕掛けづくりには若年層以上に難しい面があるといえます。地域のコミュニティや国民一人ひとりが日頃から災害に備えることを目的とする「**災害被害を軽減する国民運動**」の中心的な役割を果たすべき壮年層の災害に対する関心呼び起こし、防災・減災に向けた行動や、災害への「備え」をうながすきっかけになるべく、一日前プロジェクトが誕生しました。

Ⅱ. 平成 25 年度実施要領

	対象災害	ヒアリング地区		ヒアリング対象	ヒアリング実施時期
1	東日本大震災 (平成 23 年 3 月)	岩手県	釜石市	中学生 (震災当時小学生)	2013 年 6 月
2		岩手県	釜石市	仮設団地住民	2013 年 7 月
3		岩手県	宮古市	建設事業者、 住民	2013 年 7 月
4		宮城県	名取市	住民	2013 年 7 月
5	前線による大雨 (平成 22 年 10 月)	鹿児島県	奄美市	住民 行政職員	2013 年 5 月
6	前線による大雨 (平成 24 年 8 月)	京都府	宇治市	住民 行政職員	2013 年 6 月

Ⅲ. 「一日前プロジェクト」のエピソードについて

「一日前プロジェクト」のエピソードは、国民一人ひとりが災害に備えることの大切さを自分の事として受け止め、それを行動に移すきっかけとしていただくためのエピソードであり、多様な場面での活用が期待されています。

「自分だったら」「我が家だったら」「我が社だったら」というように、自分の身の上に置きかえて読み進めてください。

また、最初から順番に読む必要はなく、年齢や性別、家庭や地域、職場などにおける役割など、自分と似かよった立場や境遇の方々のエピソードを拾い読みしたり、興味のあるタイトルにひかれて読んでみたりなど、自由に読み進めてください。

一つひとつの小さなエピソードから教訓などを感じてもらい、減災の大切さを知るきっかけとなれば幸いです。また、「おもしろい」と感じたエピソードは、ご家族、友人、ご近所、地域コミュニティ、職場の方々などへもご紹介ください。

平成 25 年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災 害	ページ
地震・津波	2日前には逃げたのに・・・	東北	家庭	東日本大震災 (平成 23 年 3 月)	9
	私は生きる、津波で死んだ家族の分まで				10
	親のしつげに感謝 ～我が家の防災教育はとてシンプル～				11
	ばあちゃん「逃げなくていいよ」、 「でも逃げなくちゃ」と力入れ戸を開ける				12
	固定していた本棚から本飛び出し、山のように				13
	漁師の父さん、やっと生き残る ～「津波」って大変なことなんだ～				14
	流された家の中で九死に一生 ～津波は防災マップどおりには来なかった～				15
	家に入ったとたん庭先に津波 ～止めたはずの車が動く～				16
	聞いたより 1 日早く電気が復旧 ～工事の人を思い出し「ありがたいな」～				17
	地震後は地域で水汲み手伝う ～今では仲良くなった近所のおじいちゃん～				18
	きれいごとばかりじゃないけど、お互い様なんです				19
	できる人がやるしかない ～津波の合間に必死の救助～				20
	「大津波が来る！」と叫んでも「そうなの？」とご近所さん ～「とにかく、逃げよう」と一緒に避難～				21
	「3メートルの津波」に危機感持てず ～防潮堤を越えた津波は高い水の壁～				22
	震災から2年半、将来の不安増す仮設生活				23
	津波はまるで大きな川のように ～大きな木も根こそぎ流された～		24		
	水道水で作った特別なレタス、お世話になった人たちに		25		
	夜の灯りで人がいるのを確認、食べ物を配って歩く		26		
	津波は逃げた駅の階段まで		27		
	6年の僕たちが1年生を誘導 ～義足の友達はおんぶして～		28		
	「危ないから行かないで」と母に止められる ～3日後に父と再会、「てんでんこ」の意味実感		29		
	大津波警報受け通行止め配置を手配 ～現場へ向かった作業員は危機一髪～		30		
	道路の復旧支えた現場のチームワーク		31		
	地域を守る使命感 ～とにもかくにも道を通す～		32		
	「ガッツガッツ！」防潮堤にぶつかる船の音聞き、津波をイメージ ～冷静な判断が作業員の命救う～		33		
	「あれ？おかしいな」 ～過酷な毎日で従業員の名前も消える～		34		
	身にしみた捜索活動の過酷さ		35		
	「何とかすっべ」と無理せず、それなりに前向きに ～被災後の農業再建は苦労つづき～		36		

平成 25 年度「一日前プロジェクト」エピソード一覧

災害種別	タイトル	地域	場面 (主なもの)	災 害	ページ
風水害	すっかり忘れてた「水って怖いもんで」 ～停電にも危機意識なく「もうちょっと寝てよか」～	近畿	家庭	前線による大雨 (平成 24 年 8 月)	37
	家の両側がまさかの土砂崩れ ～逃げられる場所をきめ細かく考えておくべき～				38
	ボンネットの上まで水で、車はアウト ～大雨で排水溝にゴミ詰まり～				39
	旧村の地域に呼びかけボランティア ～高齢者多く無理せず半日作業も～		40		
	濁流のすさまじさにあ然 ～家の底の土をさらっていった～		41		
	豪雨への備えにヌカリあり ～過去の災害教訓を活かせず～		42		
	マンションの1階だけが床上80センチ ～水害きっかけに自主防災組織で水位センサー設置～		43		
	泥水かぶった道に水を流して清掃 ～心強い地域の助け合い～		44		
	毎日、全戸に手作り通信配達で不安解消 ～ボランティアのプロ意識にも感動～		45		
	緊急呼び出して車で出勤 ～アンダーパスに突っ込み間一髪で脱出～		46		
	報道機関からは嵐のような問い合わせ ～メディア対応の教訓で情報提供のあり方見直し～		47		
	救助する側が救助ヘリで帰還 ～思いもよらなかった状況の悪化～		48		
	「土のう持ってきて！」の電話殺到 ～指示を出す人が電話をとってはダメ～		49		
	朝がたの小雨に油断 ～台風に比べ危機感少なく～	九州	地域・ご近所	前線による大雨 (平成 22 年 10 月)	50
	水害の水は洗い流せ ～20年前の経験活かし、お湯を浴びてもらう～				51
	雨降る屋上で数時間 ～ビニールシートで妊婦さんを守る～				52
	必死で守った利用者の命 ～ごみ袋のボンチョで体を温める～		53		
	「内海」から水が押し寄せた ～初めて見る現象に危機感～		企業・職場		54
	濁った水、ゴロゴロという音・気づいていた異変 ～想像できなかった施設内への濁流～				55
	もし、私が残っていたら・・・ ～できなかった大雨情報の把握～		行政		56
急に襲ってきた猛烈な雨 ～頭の中が真っ白に～	57				
かるうじて写した被災写真 ～状況を伝えねばとネットで送る～	58				
観光客は車の中に避難 ～エコノミー症候群に気を配る～	59				

平成 25 年度「一日前プロジェクト」
エピソード集

2日前には逃げたのに・・・

(宮古市 50代 男性 建設会社社長)

震災の2日前の3月9日に三陸沖で地震が発生し、津波注意報が出されました。宮古の沿岸に住む80歳を超える私の叔母は、その注意報を聞いて逃げています。

逃げたけれども、そのとき津波は50センチしか来なかったのです。

私が一番ショックなのは、9日に逃げているのに、11日には逃げなかったという事実。「この間とは違うから」と言っても、頑として言うことを聞かず、説得していたお嫁さんともども亡くなってしまったのです。

震災のあの日、地元のラジオ局は、地震発生後に気象庁が発表した「14時46分津波の第一波観測、大船渡で20センチ」を放送しています。

その低い観測値を聞いたから逃げなかったという話もありますが、私はそういうことではないと思います。海の近くで大きな揺れを感じたら、何度でも逃げてほしかったなと思っています。



私は生きる、津波で死んだ家族の分まで

(宮古市 90代 女性)

私は昭和8年の津波(昭和三陸津波)を知っています。昭和8年3月3日でした。夜中に地震が起きて、何が何だか分からないまま、近所の人と一緒に山へ逃げました。

波が来て、みんなさらっていきました。家族も家も。小学校5年生の時です。実家は商家で、何不自由なく育っていたのに、一夜にしてひとりぼっちになりました。

それからは宮古の親戚にお世話になったり、北海道の果てまで行ったりして苦労しました。すぎる人もなく、何度天井を見つめて夜を過ごしたかわかりません。それでも、「ふるさとに帰りたい」の一心で辛いことも我慢しました。津波で死んだ家族の分まで生きようと思いました。

ふるさと田老に戻り、結婚して子どもを育てあげ、幸せな生活を送っていたところへ、また、あの時と同じように大津波がやってきました。

田老にも今回の津波で親を亡くした子どもたちがいっぱいいます。私は、その子たちに「頑張れ、自分のためだ。頑張るしかない」と言いたいです。



親のしつげに感謝

～我が家の防災教育はとてもシンプル～

(宮古市 60代 女性 元校長)

私たち6人姉弟は、地震が起こるといつも、「地震だ、逃げろ！それー」って、ランドセルを背負って近くの山に逃げました。ランドセルが空っぽだからと教科書をとりに行こうとすると、「絶対に戻るな！」と言われました。

夜は公民館へ逃げました。真っ暗でも着られるように服をたたんで順に枕元に置いて寝ること、すぐに外へ出られるように玄関の靴を揃えておくことが我が家の決まりでした。

東日本大震災の日も、迷わず逃げることを選びました。地震が起きたのは5時間目の授業中。校舎がメキメキと揺れる中、生徒を集め、一枚ジャケットを羽おらせ、中学生には小学生を手伝わせて避難しました。

私の両親は昭和三陸津波で家族を失っています。それだけに、子どもたちに津波の恐ろしさを徹底して教えてくれたのだと思います。とてもシンプルな分かりやすい防災教育でした。



ばあちゃん「逃げなくていいよ」、「でも逃げなくちゃ」と力入れ戸を開ける

(釜石市 震災当時小学4年 女子)

学校から家に帰ってテレビを観ていたら、地震が来ました。家にいたのは、ばあちゃんと私の二人だけでした。

家の玄関のドアがなかなか開かなくて困ったけど、思いっきり力を入れたらガラッと戸が開いたので、ばあちゃんと一緒に避難しました。

ばあちゃんは「逃げなくていいよ」と言ったけれど、私は「逃げなきゃだめだ」と思いました。

どうしてかという、小さいころから、親に「ここは海に近いから、昔も津波がいっぱい来たんだよ」と、ウルサイほど言われていたからです。

その日の夜は、父さんも母さんも、どこにいるのか、生きているのかさえ分からずに、「家がなくなっちゃたら、どうしよう」とか考えたりしていて、あまり眠れませんでした。



固定していた本棚から本飛び出し、山のよう

(釜石市 震災当時小学3年 男子)

連絡帳に宿題のこととかを書いている途中でいきなり地震が来て、机の下に隠れました。揺れが止まってから、1年生から6年生まで、急いで避難訓練で使う通路から校庭に逃げました。中には泣いている人もいました。

20分ぐらい経ったところにお母さんがジャンパーを持って迎えに来てくれて、家に帰りました。ぼくの部屋は、本棚は固定していたから倒れていなかったけど、本が飛び出し、山になっていてびっくりしました。

家は山の方だから津波は大丈夫でした。家にはお米とか乾パンもあったし、食べるものにはあまり困らなかったけど、電気が通じず、炊飯器が使えなかったので、カセットコンロを使ってご飯を炊いて食べていました。ちょっとお粥みたいだったけど、梅干しとか入れて工夫して食べました。



漁師の父さん、やっと生き残る

～「津波」って大変なことなんだ～

(釜石市 震災当時小学4年 女子)

避難する途中に海が見える広場があって、津波は自分たちも見たことがないから、「どなんだろう」と思って見てみたら、海がありませんでした。

「何でないだろう」と思いながら、そのまま津波は見ないで行きました。後から知ったのですが、その時は波が引いていて、海が見えなかったのです。

私のお父さんは漁師で、何日かたって生きていたことが分かりましたが、津波にのみこまれて死にそうだったみたいです。やっと生き残ったんだという話をいっぱい聞かされました。私はびっくりしたというか、「生きていたんだ」とうれしかったです。

父さんと一緒にいた人が亡くなったことも聞きました。「津波」、「津波」って簡単に言っているけど、大変なことなんだなって思いました。



流された家の中で九死に一生

～津波は防災マップどおりには来なかった～

(釜石仮設団地 50代 女性)

揺れが止まるのを待って、仏壇を片づけたり、父親の写真が落ちたのでそれをタンスの中に入れていたりしていました。でも、あまりにも家の前の国道をみなさんが逃げて行くので、夜勤明けで家にいた息子が「ちょっと防災センターを見てくる」と言って出かけて、戻ってくるなり「津波だ!」と叫びました。

足もとを見たらすごい水が来ていて、気がついたらもう水の上って感じで、母親と息子、うちの2階に逃げてきた妹夫婦と私の5人が家ごと流されてしまったのです。

メリメリバリバリバリバリッと家が壊れる音の中、車がヒュッと飛んで向かいの山にぶつかるのを見たりしながら波の流れにほんろうされていました。いったん流れが止まり、家が止まったんですが、今度は引き波で家が回転し、バリバリッと壊れながら海の方に引かれて行きました。

その後、次の津波が来た時にそのまま後ろ向きで陸の方に流され、お寺のすぐ前のところで何かに引っかかって止まりました。自衛隊に救助されたのは13日の朝でした。

私はいつも防災マップを意識していました。うちの辺りは津波が川の堤防を超えた場合の到達点だったので、ピチャピチャという状態を想像していて、3メートルの津波と報道された時にもせっぱ詰まった状態とは思わず、安心していました。それが家ごと流されるなんてね。想像もつかないことが起こりました。



家に入ったとたん庭先に津波

～止めたはずの車が動く～

(名取市 50代 女性 農家)

ものすごい揺れで、畑の中で地面に突っ伏したまま動くこともできませんでした。地震がおさまってから収穫した野菜を車に積み、家にひとりでおばあちゃんが心配で、かなりのスピードで車を走らせました。

途中、木は倒れているし、道路には亀裂が入っているし「こりゃ、大変だ」と。

車を降りて家に入ったとたん、「え？エンジン切ったのになんで車が動くの」とびっくり。庭先にとめた車がプカプカと水の中を流れていきました。一生懸命運転していて、後ろから津波が来ているのにも気づかずにいたのです。

チリ地震津波が来るとか騒いでいた時も「津波はここまで来ないから、大丈夫」と言っていたおばあちゃん。「ばあちゃん、津波来た!」、「ここまで来ないよ」、「来ないじゃなくて、来たの!」という会話の後、おばあちゃんは腰が抜けたみたいになってしまい、後ろから腰を押して2階にあげました。

畑は津波で被災した空港の金網のそばでしたから、もう少し仕事をなんて思っていたら、津波にやられていたと思います。もしもおばあちゃんが家にいなかったら、私は畑にいて津波の犠牲になっていたかもしれません。「人を心配するのは、自分のためにもなるんだな」と思いました。



聞いたより1日早く電気が復旧

～工事の人を思い出し「ありがたいな」～

(釜石市 震災当時小学5年 男子)

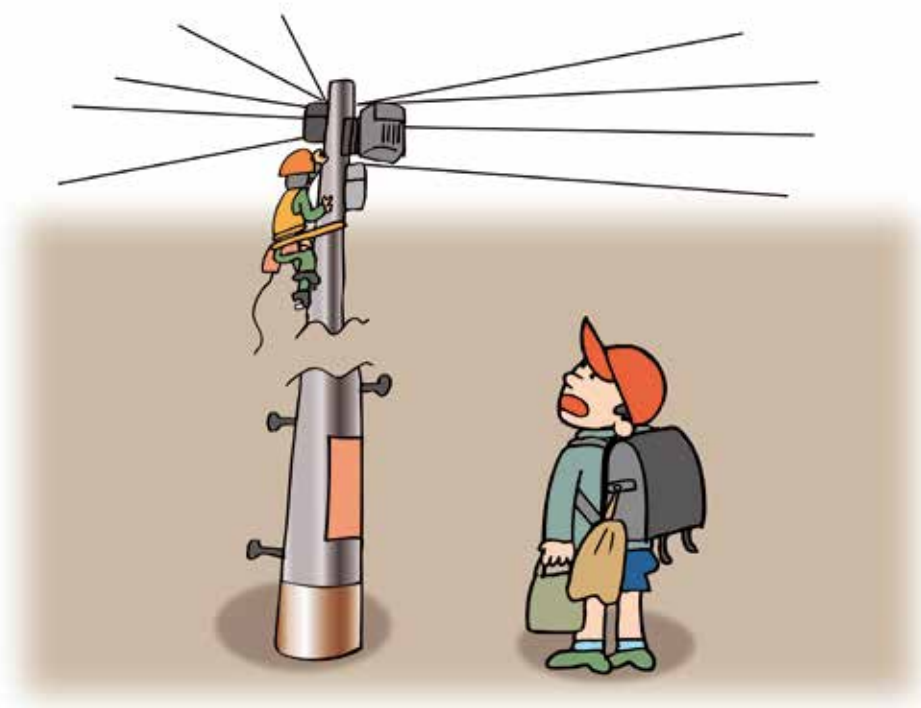
地震が起きたのは、社会科の授業中。「帰ったら何をして遊ぼうかな」なんて、上の空だったときに揺れだしました。すぐに「机の下にもぐれ!」となって、その後で全校一斉に高台にある高校に避難しました。

避難してしばらくの間は、まちの方で発生した火災をただただ眺めているといった状況でした。

ぼくは、迎えに来たお父さんと一緒に、山の中を歩いて家に帰りました。水とガスは奇跡的に生き残ったけど、電気が通じなかったから、テレビも電話も全部ダメでした。

地震からひと月たった学校からの帰り道、電柱によじ登って電線を引っ張っている人がいたので、しばらくそれを見ていました。で、その人が降りてきた時に「いつ電気 comes んですか」って聞いたら、「明日かな」って言われました。

だけど、それより早くその日の夕方に電気が復旧したのです。電気がついたときには工事の人のことを思い出し、「ありがたいな」と思いました。



地震後は地域で水汲み手伝う

～今では仲良くなった近所のおじいちゃん～

(釜石市 震災当時小学5年 男子)

その日の学校は早帰りでした。お母さんも仕事先で、家には誰もいないので、友達と一緒にいつものように父さんの工場の方に帰りました。ランドセルを下ろして、「ただいま！」といった瞬間に地震が来ました。工場は道路一本挟んですぐ海でした。

すぐに事務所の机の下に隠れたけれど、書類は散らばるし、ガラスもバリバリ割れて飛び散り、手をつくると手につきささるような感じでした。じいちゃんとお父さんは留守だったので、すぐにお母さんの仕事先まで行って、一緒に高台にある家に帰りました。

津波の被害もなかったので避難所へは行かず、夜はろうそくとかを使って過ごしました。家では何もすることがなかったから、近所のお年よりの水くみとかを手伝いました。

なので、今では、近所のおじいちゃんおばあちゃんから登下校中に「おはよう」とか「今、部活延長なの？」とか声をかけてもらえるようになりました。



きれいごとばかりじゃないけど、お互い様なんです

(釜石市 震災当時小学4年 女子)

最近、復興を支援してくれる人たちに絵を描けと言われて、流されていく人と家を描いたら、「描くな」って言われました。で、少しイライラしています。私は、「復興と言っても、きれいごとばかりじゃない」って、そう思うのです。

震災から2年以上たった今、ガレキとかを引き取る話の中で、「こっちに持って来られると放射線が・・・」とか言っていますよね。でもそれって、そっちの人もこの体験をしてもらえれば分かると思うんですよ。

災害はどこにでもあると思います。こっちだけにあるのではなくて、そっちの方にも絶対来ると思う。お互い様なんです。

そっちが大変な時にはこっちも助けるんだよってことを分かってもらいたいのです。



できる人がやるしかない

～津波の合間に必死の救助～

(釜石仮設団地 60代 男性)

テレビでよく映像が流れますが、映像で見る震災の状況と、実際に肌で感じる臭いであったり、風であったり、音であったりというものは、全然違うわけですね。泣き叫んでしゃがんで立てない人もいたけれど、みんな自分がどうするかが先決で、それをかまっていられない状況でした。

人が流されているのを上から見て、「電柱なり、ポールなりとにかく捕まれ！ 離すな！ 離すな！」と言っておいて、波が引いて行った時に降りて行きました。いつまた津波が来るか分かんないから、こっちは早く助けに行こうとあせるけど、膝の高さまで水があつたら身体をもっていかれちゃう。やっとたどり着いても、物にすがっている人は、手を離せと言っても硬直しちゃって離せない。もう水を含んでいるから重いでしょ、二人ぐらいで抱き上げて助けました。

次に大きな波が来た時、さっき人を助けていた時に来ていたらどうなったんだろうと思ったけど、その波が引くと、だまって見ていられないんです。感謝もなににもあの時はそれが当たり前でしたし、足がすくんで助けに行けない人が悪いんじゃないんです。できる人がやるしかない、誰を恨むじゃなしにね。

自分たちはこの震災で全てをなくしてしまって、ゼロどころか、マイナスからのスタートになっちゃった。じゃ、その気持ちをどこにぶつけるかといっても、ぶつける場所がないんですよね。自然しかないんです。あとは自分たちがこれからどうしようとするしかないんです。



「大津波が来る！」と叫んでも「そうなの？」とご近所さん

～「とにかく、逃げよう」と一緒に避難

(釜石仮設団地 60代 女性)

昼食後にコーヒーを飲んでいたら、地震が起きました。すると、目が不自由な主人が「普通の地震じゃないから逃げた方がいい」、「これは大津波の地震だ、いつものと違う、早く逃げろ！」とか言って、階段を降りて行こうとするんですよ。「じゃ、革ジャン着て」って出していたら、「そんなの着ているヒマないよ」って。とにかく着の身着のまま、先に主人を高台の神社に避難させました。

その時、おばあちゃんたちが立っていたので、「大津波が来るみたいだから、早く逃げて！立ってないで！」って言ったら、「そうなの？」って笑っているんです。みんなそんな感じ。「ほんとに来るから！」と叫んでいるところへお店をやっている隣のおばちゃんがリヤカー引っ張って帰ってきたので、「シャッターだけ閉めて逃げて！」と言うと、「だって、今お金を下してきたばかりだ」って。「いや、とにかく逃げよう」と言って、散乱している店先の物を片づけてやって、シャッターを閉めて、おばちゃんと一緒に逃げました。

実は前の年も大きな地震があって、津波警報が出て、避難命令が出たんだけど、何もなかったんです。それに、あの日の2日前にもちょっとした地震があって、津波注意報が出たけど全然来なかった。そういうこともあったから「たいしたことないな」という気持ちがどこかにあったのかもしれない。



「3メートルの津波」に危機感持てず

～防潮堤を越えた津波は高い水の壁～

(釜石仮設団地 70代 男性)

防災無線で3メートルぐらいの津波が来ると聞き、アパートの管理人もしていたので、「津波が来るから逃げろ！逃げろ！」と、建物内を言って回って避難させました。ただ、心臓や足腰の悪い人や高齢者、「ここまで来ないから大丈夫だよ」と言っている人たちが12人ぐらい残っていましたので、私も残ることにしました。

1階と2階の人を3階の空き部屋に逃がしてから海の様子を見に行くと、水がダーッと引いて、砂浜に波がチョロチョロときているだけでした。そして、湾の入口の方には、水平線なのか何なのか分からない白い帯がありました。

すると、その白い帯が一気に高くなってきたのです。「3メートルの津波ならたいしたことはない。防潮堤があるから、越えても1メートルぐらいだろう」と思っていたのに、ダーッと波が防潮堤を越えたとたん、立っちゃったんですよ。水の壁みたいに。

それが一気に市街地を襲い、木造住宅はみなメリメリと音をたてて壊れました。うちのアパートは口の字型で中庭がありましたから、津波はうずを巻きながら3階の床上まで到達しました。3階にいた人たちは4階に逃がして無事でした。

夜の9時ごろにようやく水が引いたので、避難所に行こうと歩き出しましたが、旧国道は流れてきたガレキで通れず、やむなくアパートに戻り、空いている部屋にみんなを集めてひと晩過ごしました。道路が通れなければ避難所にも行けないんですよね。



震災から2年半、将来の不安増す仮設生活

(釜石仮設団地 60代 男性)

震災の年の8月にこの仮設に移り、自治会の役員をしています。最後にできた県の仮設で、地元の施設に入れなかった人たちが、いろいろな地域から寄り集まっているため、最初はお互い顔も分からない状態でした。自治会を作ってだんだんコミュニティはできてきたのですが、2年も経つと、気の緩みもあるし、「この先自分はどうなるんだろう」というイライラもあって、わがままな人も出てきます。仮設団地の自治会は、いろんなところから集まって、最後はなくなるものですから、まとめるのは大変なんです。

近ごろ、大学や企業の支援を受けて団地内の有線テレビ放送を始めました。イベントに出て来られない人のために録画して放送するのですが、その編集作業は普通のビデオとは違って技術的にも難しく、時間もかかります。それでも、仮設のコミュニティを良くしようと自治会の事務局はがんばっているし、会長さんは予定がない日を探すのがむずかしいほど忙しい毎日を送ってくれています。

復興住宅へは何人か入ったけれど、これからどっと増えてきます。計画からいうと、来年から本格的になるようですが、3千戸必要なところに50戸ぐらいしかできていないから、まだまだ。私たちも復興関係の委員会を結成して、今動き始めたばかりです。



津波はまるで大きな川のように

～大きな木も根こそぎ流された～

(名取市 60代 男性 農家)

津波はまるで大きな川のようになって、畑のビニールハウスやドラム缶、消防ポンプやトラックなどそこにある物すべてをのみこみながら、私たちの目の前をゴーゴーと流れていきました。大木が流されるほどの強い流れでしたからね。近所の娘さんは泳いで何とか助かりましたが、お父さんお母さんは津波の犠牲になりました。

ちょうどその日は、レタスとチンゲン菜の初収穫の日だったのです。うちの奥さんが採った野菜を車に積んで家に帰ったところで、やってきた津波で車は流されました。それから3、4日して、やぶに引っかかっているうちのバンタイプの軽自動車が見つかりました。

車は使いものにならなくなりましたが、野菜を入れていたコンテナは重ねていたので、下の段は泥になっていたけれど、上の段は野菜もきれいでした。で、みんながそれを「野菜がなくなったから」と言ってもらっていきました。うちは野菜中心の食事ですから畑がやられるとどうにもなりません。当時は店にも何もなくて大変でした。

海から3キロも離れているこの地域にまさか津波がくるとは思ってもいませんでした。あれから2年半、震災当時の苦労話をして、ここから少し離れた駅周辺は全然被災していないから話が合いません。もう風化しつつあるんです。



水道水で作った特別なレタス、お世話になった人たちに

(名取市 60代 女性 農家)

パイプハウスとかで作っている野菜は井戸の水を汲んで使うのだけれど、津波のせいで井戸水が塩水になってしまいました。2年半たった今もダメです。田んぼの方は雨水のおかげで地面の塩がだいぶ抜けてきているけれど。

震災後、井戸水の代わりに水道水で野菜を作ることになり、今までブロッコリーやレタスとか5品目作っていたところを3品目がやっとになりました。自分で手を抜いたわけじゃないんだけど、抜かざるを得ない状態になってしまったのです。

いろいろ支援をもらってやっているんですが、ハウス栽培は一回やめしまうと元に戻るのが大変。自分たちも2年半の間に歳をとって体力が落ちてきていますから、土地が使えるようになって、今度は体やペースが元に戻らなくなってしまう。生産意欲を呼び戻すまでには時間が必要だなと感じています。気はあせているんですけどね。

水道水で野菜を収穫したら、ものすごい金額の請求がきました。水道水をかけて作った特別なレタスが初めてできた時は、支援してくれた人に渡しました。「売ってお金にした方がいいんじゃないの」と言われたけど、お世話になった人たちに食べてもらいたかったのです。



夜の灯りで人がいるのを確認、食べ物を配って歩く

(名取市 50代 女性 農家)

あの日、膝ぐらいまで水がきたので、おばあさんを2階にあげて、1階の仏壇の口ウソクやペットボトルの水などを全部2階に運びました。夜、ふとんを敷いて、おばあさんを寝かせる準備をして外を見ると、小さな灯りがポツンポツンと見えました。

「あ、人がいるな」と確認し、見える範囲の場所を覚えておき、翌日に食べ物を配って歩きました。とにかく避難所に行けない人の在宅避難と避難所避難との違いは大きく、避難所には余るほどの物資があったのに、家にいる私たちには何もありませんでした。

人手がたりなかったせいか、水が欲しいと言うと、少し離れたところに取りにきてくれと言われました。ツエをついている年よりはそんなの無理なのに。そしたら、応援にきていた他県の水道局の人が「飲み水ありますか」って、一軒一軒回ってくれてね。本当に助かりました。

当時、産直*仲間がおにぎりや煮魚等を作って持ってきてくれて、食の有り難みが身にしみました。だけど、寒い時期だから次の日にはおにぎりはカチカチ。向こうは気をつかって、中に梅干しやらサケやいろいろなものを入れて作ってくれているでしょ。暖めて食べようとオジヤにするとすごい味になってしまうのです。

もったいないから捨てずに食べたけど、私が逆の立場でみなさんにお返しできる時には、何にも入っていない真っ白なおにぎりとおかずをあげたいなと思っています。

*産直とは、生鮮食料品や特産品などを卸売市場など通常の流通経路を通さずに生産者から消費者へ直接供給すること。



津波は逃げた駅の階段まで

(釜石市 震災当時小学4年 女子)

あの日は早帰りの日でしたけれど、私はお楽しみ会の企画をする係だったから居残りをしていました。ほんとは習字に行く予定で、そこは海の近くだったから、もし行っていたら、あぶなかったかもしれないと思います。

最初のうちは気がつかなかっただけけれど、友達が「地震来たよ！」って言って。そのうちに立ってられないぐらいの地震になって、教室の上から物が落ちてきました。

先生が教室に来て、みんなで避難することになり、近くの駅まで走って逃げました。駅は学校より少し高いところでしたが、津波は駅の階段までやって来ました。

ぎりぎり間に合いましたが、津波を見た時はすごいびっくりしたし、「もう生き残れないのかな」と思いました。

私は、家族も家も無事だったけど、家を流された友達が何人かいました。「自分のものとかも全部無くなってしまって大変だな」と思って、何かできることがあれば手伝ってあげたいという気持ちになりました。



6年の僕たちが1年生を誘導

～義足の友達はおんぶして～

(釜石市 震災当時小学6年 男子)

友達の家でゲームをして遊んでいる時に地震が起きました。ぼくらがいたのは3階の部屋でしたが、2階に下りてから、2階で遊んでいた友達の弟(小学校1年生)たちに「こっちへ来い!」と言って、本棚とか倒れてくるものがないところに集まって、揺れがおさまるのを待ちました。みんなで15人ぐらいはいたと思います。

避難をしようとする時に、1年生の子たちは避難場所とかが分かっていなかったなので、6年生のぼくたちが1年生たちを誘導するみたいな感じで、避難場所の小学校まで連れて行きました。

それから、友達の中に義足の子っていて、あまり早く走れなくて遅れてしまうので、仲間でその子をおんぶして逃げました。

1年生たちは、おびえていたというか、しゃべれないというか、意外に静かだったのを覚えています。



「危ないから行かないで」と母に止められる

～3日後に父と再会、「てんでんこ」の意味実感

(釜石市 震災当時小学4年 男子)

授業を受けている途中で地震が来て、いつも避難訓練でやっているように机の下にもぐり、揺れがおさまるのを待ちました。

それから、先生に「避難するぞ！」って言われて、避難場所となっていた近くの高校へ避難しました。

後から母さんが来たけど、「父さんはまだ来ていない」と言われました。ぼくは父さんや家がどうなっているのか気になって、津波を見に行こうとしたけど、母さんに「あぶないから行かないで！」って言われてやめました。

その日は体育館の暗幕を床に敷いて、その上に毛布を敷いて寝ることになりましたが、ぼくは父さんとの連絡がとれずにいたので、あまり良く眠れませんでした。

やっと3日後に父さんが避難場所に来ました。家族がバラバラに避難してきて、なんて言うか、よく教わっていた「津波てんでんこ」だったなと思います。



大津波警報受け通行止め配置を手配

～現場へ向かった作業員は危機一髪～

(宮古市 30代 男性 建設会社社員)

私は道路の維持管理の仕事をしています。震度4以上の時にはパトロールを実施することになっていますので、大きな横揺れがしつこく続く中、外にいた2人の作業員にパトロールを指示しました。

自分もパトロールに出ようとした矢先に、市の防災無線から「大津波警報が発令されました」との声が流れました。大津波警報発令時は、国道45号線の宮古管内の5か所を通行止めにするのが国との間で決められていますので、すぐに現場事務所に引き返し、電話で通行止めの配置の手配をし、そばにいた人間に一番遠いところに行くよう指示しました。

その辺りで停電になり、一般電話も携帯も不通になって、通行止めの指示は出したものの実際にできたかどうか分からない状況になりました。

配置場所に向かった作業員の中には、被災した地域を通って行った人間もいましたから、もう少し遅かったら津波に巻き込まれていたかもしれません。まさに危機一髪だったと思います。



道路の復旧支えた現場のチームワーク

(宮古市 60代 男性 建設会社社員)

地震が起きたのは年度末で、道路工事はちょうど最後の仕上げの段階でした。現場は平らではなく少し斜めになっていましたので、せっかくきれいにならして固まりかけていた表面のコンクリートが、地震の揺れでゴーツとはがれ落ちてしまったのです。それほど強い地震でした。

電柱が大きく左右に揺れ、遠い山の岩肌が崩れて砂ぼこりが立つのが見えました。これからどう動けば良いか会社の指示を待とうとしましたが、全然連絡がとれない状況でしたので仕方なく会社に戻りました。

道路の維持管理の仕事をしている私たちの使命は、一刻も早く、道をふさいでいる流された家やガレキを取り除いて通れるようにすることでした。

多少の混乱はあっても何とか最後までやり通せたのは、指示で動く人間同士のつながりというか、何十人という現場のチームワークが普段から徹底してできていたからだと思います。

いくら社長が言っても、現場の中で伝わらない状況ではうまくいきませんからね。



地域を守る使命感

～とにもかくにも道を通す～

(宮古市 50代 男性 建設会社社長)

私たち建設会社は道路の維持管理を請け負っています。ただ、お金をもらっているからやるというのじゃなくて、地元を守りたい、必要とされているからやっているんです。「ここを守っているのは自分たちなんだ」という気概を持って仕事をしています。これは社員にも何度も繰り返し伝えていきます。

震災発生後は、沿岸に向かうルート確保のために国が実施した『くしの歯作戦※』に加わりました。それは、とにもかくにも主要道路の国道45号線まで道を通そうというものです。それができなければ支援物資も、燃料を運ぶ緊急車両も通れませんからね。

初めての津波災害への対応でしたが、私は判断を現場監督に委ねました。「信頼しているからここは誰々に任せる」ということでないと現場は動きません。「全部おまえに任せる」というのは正直一番つらいのですが、社員たちは本当に良くやってくれたと思います。

いろんな計画を立てて、いろんな準備をするのも大事ですが、現場の判断というのは非常に大切ではないかと思います。現場で判断するためには、知識、判断力と信頼関係を培っていくことが大事なんです。

※くしの歯作戦とは、東北道、国道4号から津波被害で大きな被害が想定される沿岸部の国道6号、45号への進出のための「くしの歯型」救援15ルートを通行可能にしたもの。



「ガッツガッツ！」防潮堤にぶつかる船の音聞き、津波をイメージ

～冷静な判断が作業員の命救う～

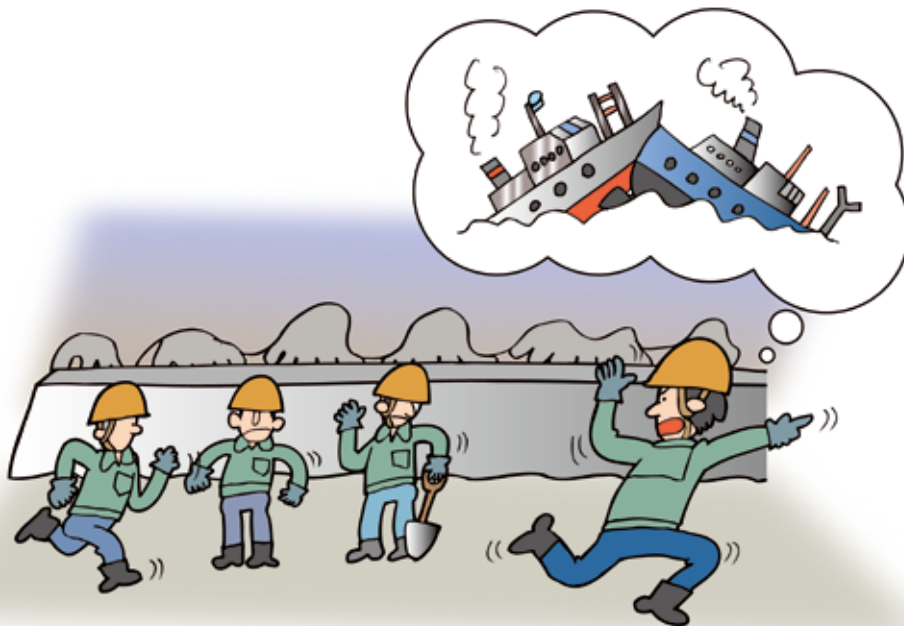
(宮古市 30代 男性 建設会社社員)

地震発生当時、海の近くで交通規制を敷き、道路の舗装をしていた現場がありました。

もともと交通量の多い道路を交通規制していたので、作業員はよほどのことがないかぎりその場を離れることはしません。でも、係留されている船が防潮堤にぶつかる音や、船同士がぶつかり合う音を聞いて、直感的に「これは、大変だ」と感じた人間が「逃げろ！」と叫んだため、作業員は一齐に海と反対側の小高い場所に駆け上がり、全員無事に避難することができました。

防潮堤を越えた津波は、バアッと平地の方に広がって徐々に増えていく感じになりましたから、防潮堤のお陰で少しは時間が稼げた、なかったらアウトだったかもしれないと思います。

あとで現場のビデオを観ると、確かにガッツガッツという音が入っていました。しかし、防潮堤の内側で作業している者からは海そのものが見えません。音だけで津波をイメージできたこと、音を聞き分ける冷静な判断が何十人もの命を救ったんです。



「あれ?おかしいな」

～過酷な毎日で従業員の名前も消える～

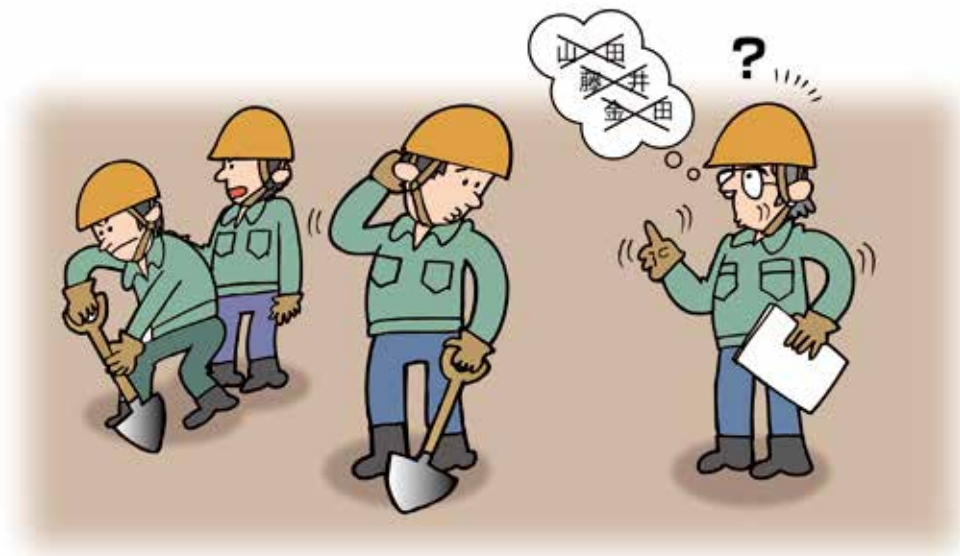
(宮古市 30代 男性 建設会社社員)

現場監督の私は、夕方まで障害物撤去作業をした後、次の段取りをしなければなりません。当時は連絡手段もなく、明日クレーンを使うとなればクレーン業者に行き、每晚8時には役所との打合せをするといった毎日でした。

そんな毎日が続く中、ある朝、作業員に声をかけようとしたら名前が出て来ないんです。「あれ?おかしいな。」とっていると、そのうち震災前のことを訊ねられても答えられなくなっていることに気がつきました。完全に記憶がなくなってしまったのです。

とにかく依頼される作業が多いんです。国からだけではなく、市町村からも個人からも一斉に依頼が来るので、それにどう効率良く順序立てて対応するかで頭がいっぱいでした。記憶が戻ってきたのは1か月くらい後です。その間はおかしいなと思っても社長に相談するゆとりがありませんでした。

当時、自分では誰にも気づかれずにやり過ごせたと思っていましたが、近くにいる人間はひそかに心配してくれていたようです。



身にしみた搜索活動の過酷さ

(名取市 60代 男性 農家)

私たち消防団員も翌々日から搜索活動を手伝いました。自衛隊の人と一緒に行動しましたが、消防団はなんぼ若くたって、自衛隊のように鍛えられていないから、松の木がダーッと倒れているようなところでは、とてもじゃないけど行方不明者を見つけることはできません。

消防団員は二次災害にならないよう、手の伸びる範囲で岡の上から並んで歩いていくのですが、自衛隊の人は大変そうでした。命縄をつけて泥の中を捜すのだけれど、ぬかるみの中だから引っ張ってもらわないと動けず、はいている胸までの胴付長靴をさかさまにすると、水がダーッと出てくるといったぐあい。

車の中で見つかった人はまるでマネキンのようでした。でも、津波に巻かれて水路にはまってしまったと思われる方や、電柱とかにひっかかって動けなくなった方たちはかわいそうな状態で見つかりました。

使命とは言え、息子みたいな年ごろの隊員がトラックの中で泣いたり、吐いたりしているのを見るのはつらかったです。



「何とかすっぺ」と無理せず、それなりに前向きに

～被災後の農業再建は苦労つづき～

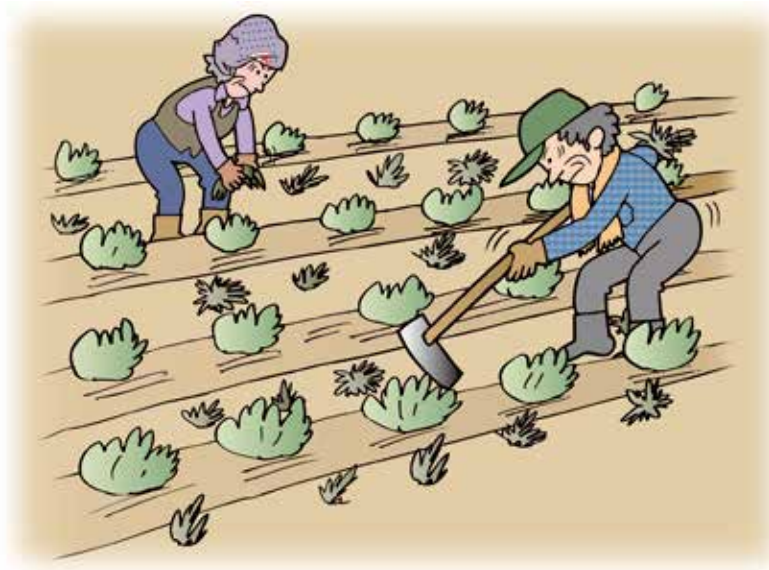
(名取市 60代 男性 農家)

ここは米と野菜の複合経営で、少量、多品目の野菜を作っています。それぞれの農家で作っているものを寄せ集めれば店になるというか、いつでも野菜がある状態。田植えの時期や稲刈りの時期を調整しながら野菜を作るのですが、みんなで相談しながらやるのではなく、あうんの呼吸なんですよ。

夏にブロッコリーの種をまくのですが、だんだん日が短くなってから、種まきが1日遅れると収穫が1週間くらい遅れます。だから年内に収穫するには、7月後半から8月のお盆までに種をまかないといけないというようなことは経験から分かっています、主要な作物の間をうめるようなかたちでチンゲンサイとかの軟弱野菜を作ってきました。

なのに、津波で機械がなくなったりして苗を植えることさえ計画的にできなくなってしまいました。家が壊れたり流されたりした人は仮設へ行かなきゃいけないし、建てかえができない人は戻ってこられません。若い人は畑仕事がなければ他に働きにいかなければならないから元に戻すのは難しいのです。

「何とかすっぺ」となると負担になって逆に精神的にもダメージを受けるから、元に戻そうとするんじゃなく、それなりに前向きにやるってことが大切で、それが先につながるのではないかなと思っています。



すっかり忘れてた『水って怖いもんやで』

～停電にも危機意識なく『もうちょっと寝てよか』～

(宇治市 60代 男性 地区役員)

僕の家は、川の起点そばに建っています。かなり深い川で、ゴォーゴォー流れるけどまだ1メートル半くらいの余裕があるし、嫁さんが「たくさん降ってるけど、大丈夫やろ」とか言ってて。そのうち停電になり、「朝の連続ドラマも見れないし、もうちょっと寝てよか」と。

そんな時、近所の人から「大変や！チェーンソー持って、来てくれないか」と呼びにきました。うちから800メートルくらい下で山崩れが起き、川がせき止められて取り残された人を救助するということですね。同じ地域でも50メートル離れると雨の量にすごい差が出てくるんですね。その場所に行ってみるまで、そんなことになっているとは思っていませんでした。

僕も小学校の教員をやっていたから、子どもたちを連れて昭和28年の山城水害の聞き取り調査にも行ってたし、「水って怖いもんやで」とおじいちゃんによく言われていたのに全く教訓にしていなかった、危機管理意識の欠如があったんじゃないかなと反省しています。



家の両側がまさかの土砂崩れ

～逃げられる場所をきめ細かく考えておくべき～

(宇治市 60代 男性 地区役員)

うちの周りは全部山です。あの日、川の水位からみてまだ大丈夫だと思っていたのに、突如私の家の両側の斜面が崩れ、車が土砂で流されそうになりました。山の斜面が崩れてきたっていうのは全くの予想外でした。

この山はほとんど傾斜角30度以上の急傾斜地で、『こんな山の横へりによろ住んでるな』とよく言われていましたが、今回、危険なところなんだということを改めて感じました。

私たちの集落の山は、ほとんどの持ち主が地元の人ではありません。40年ほど前に山を買って杉やひのきを植えたはいいけれど、もうからないからと放置して、きちんと管理されていないというのが実情です。

今回の土砂崩れでは、地域が上と下とに寸断されるような形になりましたが、避難場所は下の小学校になっているんです。本当に小さな集落なのですが、避難場所をきめ細かく考えておくことも必要だったと思います。水害後の航空写真で、小さな谷筋で崩れているところが多いのが分かりました。60年前の災害と今回を合わせていくと、危険なところがどこかも認識できるのではないかなと思っています。



ボンネットの上まで水で、車はアウト

～大雨で排水溝にゴミ詰まり～

(宇治市 70代 男性 地区役員)

うちの地域は府道より東側の水がみな集約されて流れて来るところですが、排水溝は50年前と数も形もほとんど変わっていないんです。で、なんとかその府道より向こうの水を一部よその用水路へ流していただけないかと市へ再三要望していたところでした。

あの日、朝の6時前でしたか、雷がドンドンと鳴る間ずっと激しい雨が降り、家の前の道路が冠水し始めましたので、私は堤防へ上がって川沿いにようすを見て回りました。

私の家は少し高台なので何とか前の道路だけですみましたけど、みなさんのところは戸を開けたとたんに水が入ってきちゃうから、外に出られる状態じゃないんです。戸を開けて水が入ってきて、玄関の靴を流されてしまった家もありました。

周辺の排水溝には、プランターやら自転車やらものすごい量のゴミがつまっていましたし、ボンネットの上近くまで水が上がった自動車は、みなアウトですわ。

思わぬ水が出て大変なことになりましたが、水が引くのは早かったです。1時間もついてなくて、スーッと引いて行きました。



旧村の地域に呼びかけボランティア

～高齢者多く無理せず半日作業も～

(宇治市 80代 男性 地区役員)

被災後、自治会で救援ボランティア活動をしました。「被害にあってないところで元気な人は全員出てください」と呼びかけたら、たまたまお盆休みだったこともあり、若い人がずいぶん来てくれて、延べ371人の自治会員が復旧作業に取り組んでくれました。

もともとこの地域は旧村ですから、80になっても90になっても、何々ちゃん、何々ちゃんの関係なんです。「何々ちゃんとか今大変だから、行こう」と、ダーッと行くといった具合。ただ、高齢者が多いため、午後はもう体が続かないということで、だんだんと午前中だけの作業に変えていきました。

半分いなかですからみんな家にスコップがあり、クワもあり、一輪車もあります。それらを全部持ってきてもらい、泥水や床下の土砂の排出とか畳や家財道具の処理などをしてもらいました。

泥んこになって床下の土砂をかき出す住民のみなさんの姿を見て、地域が一心同体になったと確信でき、涙が出るほどありがたかったです。



濁流のすさまじさにあ然

～家の底の土をさらっていった～

(宇治市 70代 男性 地区役員)

私は地域の防災対策メンバーです。水に浸かったところの見回りをしている最中に、ひとり住まいの姉から携帯に「助けて！今、家の前に濁流が押し寄せてきてん」と悲鳴に似た声が飛び込んできました。

急いで車に乗って向かうと、道は濁流でおおわれ、とても車を運転できる状態ではありませんでしたので、車を放置して歩いて行きました。

私の姉の家はコの字のかたちに8軒並んだ通りのいちばん奥まったところにあります。家の中は床上浸水程度でしたが、高台にあるお寺の表参道からダーッと流れてきた濁流が、路地にダーンと集まったという感じ。2メートルほどのコンクリートの壁に囲まれていたために、行く手をはばまれた濁流が渦を巻いて家の底の土を全部持って行ってしまい、家は建っているけど、土が何も無いという状態になってしまったのです。隣のお宅にはウォーッと2階近くまで土砂が入り込んでいました。

高台にあるお寺の表参道から水が流れて来るなんて、誰も予想してなかった。だから、その地域の人々のショックは大きかったと思います。



豪雨への備えに又かりあり

～過去の災害教訓を活かせず～

(宇治市 60代 男性 地区役員)

後で知ったんですけど、その当時のレーダー画像は真っ赤な雲がピンポイントでバーッと押し寄せてきていたんです。私もたいがい雨雲レーダーを見てるんですが、前日に畑で捻挫してしまい、早くから寝ていたのです。

雨があまりにきついので、夜中の3時ごろから起きていました。その雨雲が2時から3時くらいに押し寄せるといのが分かっていたら、もっと早いとこ指示が出せたのに、「抜かってたな」と思っています。

それと、昭和28年の災害教訓が2つあったことを抜かってました。その年の9月に宇治市が台風でひどい目にあったということだけしか頭になく、「台風が来たら怖いで」と思っている、今回みたいに寒冷前線が通過して豪雨になるということは「まあ、ないやろ」と。

でも、同じ年の8月15日に南山城水害が発生し、同じような雨雲が来て、雷が鳴りまくり、大雨が降り、堤防が決壊するなどして多くの方が亡くなっていたのです。南部の方の災害で宇治市は関係ないと思込んでいたというのが、最大の不覚です。

雲なんてきっちと同じコースでくるといことはまずないわけですよ。上いったり下いったりして。だから、そういうことがこの時期にあるんだということがわかっていたら、もうちょっと構えることができたんじゃないかなと、残念に思っています。



マンションの1階だけが床上80センチ

～水害きっかけに自主防災組織で水位センサー設置～

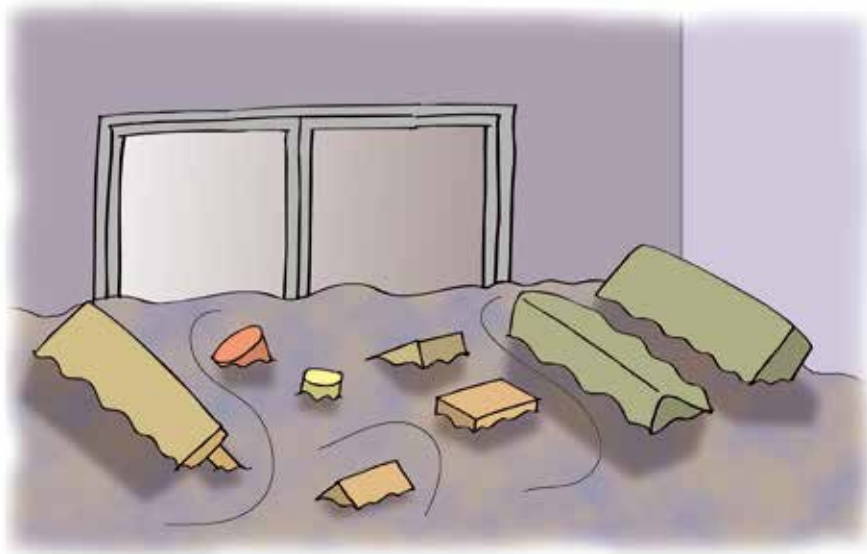
(宇治市 70代 男性 地区役員)

私のところのマンションは、ハザードマップで5メートル以上の浸水の可能性がある地域、いちばん低い水のたまり場のようなところに建っています。そして、今回の水害では、1階が床上7、80センチの浸水、2階以上は何ともないというように明暗が分かれました。1階の部屋の中は物がプカプカと浮いている状態でした。

水が少し引き始めたころ、私は1階に降りて行き、泥水をかき出す作業を手伝い始めました。それを見て、だんだんと他の人も手伝いに来るようになり、配電盤の水没でポンプが使えなかったので、数時間、手作業で泥水のかき出し作業を続けました。

非常に関係の希薄なマンションですが、この経験を『災い転じて福となす』としたいと、103世帯のみなさんに呼びかけて、自主防災組織としての防災委員会を作り、いろんな勉強をしながら少しずつ防災意識を高めています。

それと、水をキャッチしたら警報が鳴るように、敷地内で一番低い入り口の床から20センチ上に水センサーをつけました。何らかの形で危険を知ることができれば全館放送ができるし、防災委員会がすぐに駆けつけて、土のう積み作業などを開始できますからね。



泥水かぶった道に水を流して清掃

～心強い地域の助け合い～

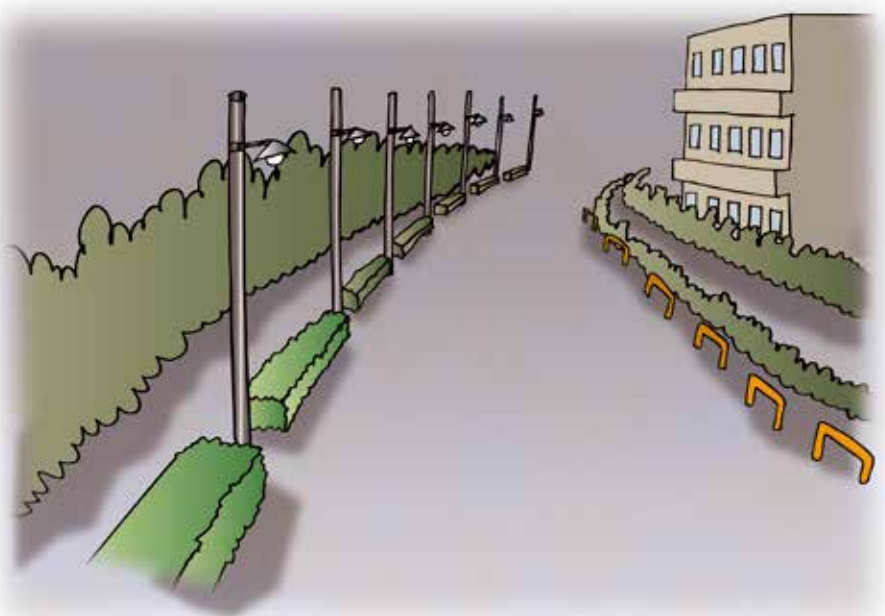
(宇治市 60代 男性 地区役員)

私が異常に気づいたのは午前4時半くらい。ものすごい雨音で目が覚めて、パソコンで気象庁のレーダー画像を見たら、それこそ強い雨、1時間に50ミリを越すような雨雲が次々とやってきていて、「これは危ないな」と思っていました。

気がつくと、近くの川の水面が上がっているのが見えたので、すぐにマンションの管理人さんなど何人かに「あと50センチくらいであふれるで」と電話しました。

案の定、5時過ぎから急激に水位が上がり、気がついた時には水が道路にあふれている状況になりました。住民のみなさんに道路があふれていることを知らせたのはこの後。もうちょっと早めに注意をうながすことができれば良かったのですが、あふれそうだという予感はあるにしても、どの程度あふれるかは予想がつかせませんでした。ちょっと気が動転していたせいもあるかもしれません。

幸い大きな被害にはなりませんでしたが、かなりの人が自分から掃除を買って出て、泥水をかぶった道路に水を流してくれましたので、前よりもきれいになったくらいでした。何かあった時のこのような助け合う力をとっても心強く感じました。



毎日、全戸に手作り通信配達で不安解消

～ボランティアのプロ意識にも感動～

(宇治市 60代 男性 地区役員)

私たちの地域は、土砂崩れによって、5日間くらい電気、水道、ガス、電話も使えず、道路も通れなくなって、完全に孤立してしまいました。

で、住民が情報を欲しがっているだろうということで、地域の名前で通信を発行することにしました。毎夜役員だけでミーティングをして、「電気の復旧は○日になる見通しです」といった情報を盛り込み、全165戸分くらいを毎回刷って、次の朝に住民に届けるということを1か月くらい続けました。だから住民に大きな不安とかはなかったと思います。

それから、床下の泥の掻き出しや樹木の伐採・整備などには、遠くは石巻から、延べ1000人ほどが来てくれました。こっちも気を使っていろいろするんですけど、ボランティアの人たちはいっさいそれをいらんと言ってね。食糧も自分で持ってきて、道路の片隅なんかで食べて、最後きちっと掃除までして帰ってくれますしね。それは見事なもんで、本当に頭が下がりました。

だから、「どっかに被災があったら、我われもいっぺん、こんな年寄り役に立つかどうか分からないけど、ボランティアで行かないかな」と話をしています。



緊急呼び出しで車で出勤

～アンダーパスに突っ込み間一髪で脱出～

(宇治市 50代 男性 市役所職員)

8月13日の晩、そんなことになるなんて全く思いもせずに気持ちよく寝てたら、役所から被害が発生しているから出勤してくれというような話があり、真っ暗な中を車で役所に向かいました。

今まで、たいがいの雨の時でも水がついたことはありませんでした。

雨がきつかったので、水しぶきだけしか見えないような状況で、ヘッドライトをハイにして走っていて、何の疑いもなくアンダーパス*を通り抜けようとしたんです。そうしたら、あれよあれよという間にハンドルが効かなくなり、車に水が入ってきて、前のドアが開かなくなり「どうしようかな」とあせりました。ハンマーも積んでませんで、後ろの席に行ってドアをクッと開けたらちょっとだけ開きましたので、脚をはさみ込んで、スルッと体を抜くようにして車の外に出たら、もう胸の下ぐらいまで水が来ていて、這うようにして手前の信号の方に戻りました。

後で考えると背筋の寒くなる話で、今では、ハンマーもちゃんと買って、運転席からすぐ取り出せるようダッシュボードの中に入れてあります。

*アンダーパスとは、交差する鉄道や道路などの下を通過するため、周辺の地面よりも低くなっている道路のこと。



報道機関からは嵐のような問い合わせ

～メディア対応の教訓で情報提供のあり方見直し～

(宇治市 50代 女性 市役所職員)

ずぶぬれになって役所に着くと、報道機関からの嵐のような問い合わせが待っていました。最初は「うわー、大変ですね」と言ってくれるのですが、そのうち思うように取材ができないもどかしさからか厳しい指摘の連続となりました。

「こう答えたいけれども、どうしましょう」と上層部に投げかけてもストップがかかってしまう。メディアから「なぜ、出せないんだ!」と言われても、担当としては市がまとめた確かな情報しか出せず、にっちもさっちもいかない状況が続きました。

まだ被害の詳細がつかみきれていない状況であると説明しても、どの地域が浸水したのか、浸水した家屋は何百か、何千かと聞いてきます。報道機関からすれば、正確に確認がとれていなくとも、今わかっていることを出してほしいということなんです。中には、特ダネを求めてくるところもあり、そういうアプローチへの対応は、正直苦しかったですね。

「いちいち全部トップまで上げていたら、いつまとまるのや」という話ですから、今回、情報班のしかるべき責任者のところで固まったものを出せる体制にしよう、防災計画の見直しを行いました。あとはそれを実動にどう生かせるかが課題だと思います。



救助する側が救助ヘリで帰還

～思いもよらなかった状況の悪化～

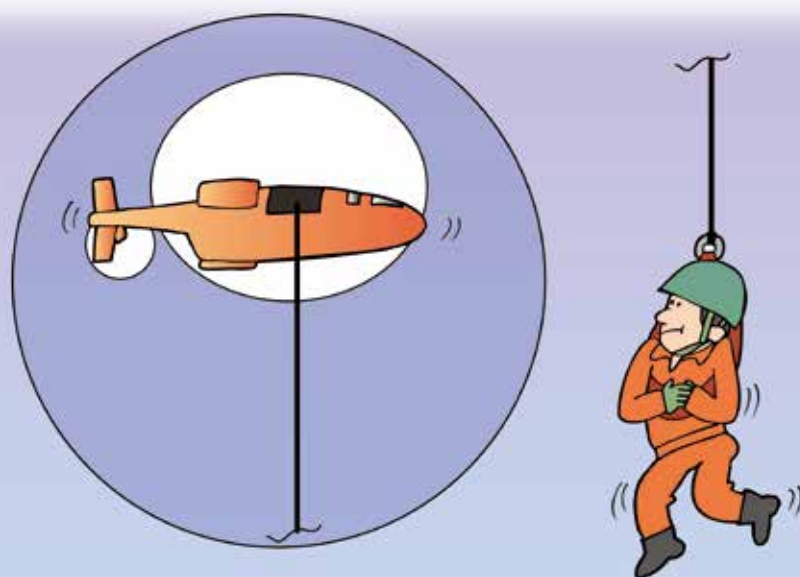
(宇治市 50代 男性 消防署職員)

土砂崩れで消防車両が通れない状態になり、先に隊員だけが徒歩で入ったという知らせを受け、消防団の副団長と一緒に車で行けるところまで行って、そこから現地まで1時間半ぐらい歩いて現地にとどり着きました。激しい雨が降る中、一歩進んだら股の辺までズボット入るような状況のところを2か所、3か所と歩いて越えて行きました。

先に救助隊が入って救助活動をしてきていましたので、私は食料をヘリで運んでもらう段取りをしたり、食料到着後の区分けなどの作業をしたりしていました。

ところが、そうこうしているうちに、集落との間の土砂災害の状況が当初よりもきびしくなってきたため、徒歩で帰るのは危険ということになり、暗くなる前に隊員等も含めて、救助ヘリで吊り上げてもらい、何とか夕方にこちらの方へ帰れたという状況でした。

「孤立して救助を求めている人がいる」という情報を受け、とにかく現地へと出かけたわけですが、「災害の状況がもっとひどくなって自分たちが帰れなくなるかもしれない」とは、思ってもいなかったのです。



「土のう持ってきて！」の電話殺到

～指示を出す人が電話をとってはダメ～

(宇治市 40代 男性 市役所職員)

市民からの電話は、「土のう持ってきて」が大半でしたが、間が悪く、お盆休みに建材屋さんが休みに土のうの確保に苦労しました。

消防も危機管理も電話は鳴りっぱなし。「あっちかけたけど、まだ土のう持って来ない」と両方に電話をかけてくる市民もいました。人を呼ばないかん、増員せなあかんというのはわかっているけど、その電話すらかけられなかったのです。

土のう以外にも、「1階が浸水してる、助けに来てくれ」、「外に出られへん、消防車で救助に来てくれ」、「うちの裏が崩れそうやねん、大丈夫か」といった電話が殺到してました。こちらとしては「今は全部出てるんで、取りあえず高いところに逃げてください」と言うしかないんですね。

今回、飛び越えれば飛び越えられるほどの川幅しかない川があれだけの水を流したわけで、誰も全く予想もつかない水害でしたから、対応体制も十分ではありませんでした。

電話対応においては、災害のことが分かっている気の利いた人を完全にフリーにしておくこと、指示を出す人が電話をとってはダメなんだということに気づかされました。



朝がたの小雨に油断

～台風に比べ危機感少なく～

(奄美市 70代 男性 地区役員)

あの日は全く、大雨の予想はしていませんでした。朝がたは小雨だったものですから、家内と畑でも行こうと言っていたくらいです。台風だったらもっと危機感をもっているんですけどね。

それが午前10時を過ぎて急に猛烈な雨が降ってきて、集落の80%近くが海みたいになって、道路は冠水し、家も全部床上浸水になりました。これは大変よということで、ほとんどの方は公民館に避難してもらいました。

道路が冠水で通行止めですよとか、誰がどこに避難していますよといった情報を地元のFMが放送していましたが、停電でしたから電池式のラジオを持っている人以外は情報が入りませんし、昼間で停電に気づかず全く異常を感じていなかった人もいました。

実際、青年団が避難していないお年寄りの家に行ってみると、「部屋の畳が浮き上がってきて初めて気がついた」と言われました。そういう人たちは青年団の連中におんぶされて避難しました。

降り始めは小雨でしたから、まさかあんな大雨になるなんて、誰も思っていなかったのです。



水害の水は洗い流せ

～20年前の経験活かし、お湯を浴びてもらおう～

(奄美市 60代 女性)

私は20年前の台風も経験しています。今回の大雨では、私は運よくカヌーに乗せてもらって避難したので、体が水に浸かることはありませんでした。

その日の夜は避難先の集会所は人でいっぱいになってしまったため、何人かで水に浸かっているお宅に泊まらせてもらいました。

その時はまだ水道も出ていましたし、ガスが使えたので、まずお湯を沸かして、避難した人で水に浸かった人たちにお湯を浴びてもらいました。

それは大事なことなんです。なぜなら、20年前の台風当時、私は面白半分で水に浸かって写真を撮ったりしていたのに、体を洗わずにそのまま寝てしまい、後で体がかゆくなって大変な思いをした経験があるからです。

水害であふれる水は、雑菌が多くてとても汚いものなんですよね。



雨降る屋上で数時間

～ビニールシートで妊婦さんを守る～

(奄美市 50代 男性 郵便局員)

私は午前中、お客様と打ち合わせをやってたんです。すると昼の12時ごろ「水が事務室の中に入ってきました」と職員から知らせがあったので、打ち合わせを打ち切り、窓口の端末機とか大事な書類をカウンターの上に載せる作業をしていました。そうしたら12時半ぐらいに急に水が増えまして、ひざぐらいの高さになりました。

最初に冷蔵庫が倒れ、ロッカーが倒れ、畳が浮いてきたので、もう、局内から出ないといけないという判断をしたのですが、水圧で出入口のドアが開かず、全員が窓をつたって屋根の上に上がりました。

そこに避難したのは8名ほど。そのうちの一人が妊婦さんだったのです。とにかく妊婦さんの体を冷やしてはいけないと思っていたら、隣の役場の課長さんが見てくれたので、何か手段はないかお願いしました。ビニールシートがあるとのことで、ロープを投げてもらい、数メートル離れたところからビニールシートや毛布をたぐり寄せ、それで雨をしのいでいました。

雨も止み、少し水が引いてきた午後4時半ごろになって、市内にあるマングローブパークの方がカヌーで来てくれたので、まず妊婦さんを乗せて、役場の方に避難してもらいました。

あまり思い出したくはないのですが、今回の災害を経験してから、いろんな状況を想定できるようになりました。当時なかった屋根に上る階段も、今は設置してあるんですよ。



必死で守った利用者の命

～ごみ袋のポンチョで体を温める～

(奄美市 50代 女性 養護施設職員)

「ただ事じゃないよね、この雨」ということで、施設の戸締まりをしていました。うちは高台にあるから冠水はしないと思っていたんですが、施設のすぐ横を流れるいつもは水の無い小川があふれんばかりの勢いだったのです。

「これ、やばい」と思ったら、沢が崩れて小川をせきとめ、土砂と濁流が施設内に一気に流れ込んできたのです。

廊下をバケツがドンブラコと流れるあり様でしたから、急いでベッドのマットレスなどをつなぎ合わせて水の流れをくい止めました。

それでも、その下からサーッと水が入り込んできます。利用者さんを車イスに載せ、下半身はごみ袋に足から入ってもらう形にして上からバスタオルで巻いて、上半身はごみ袋を頭と腕が出るように切り取って、ポンチョのようにすっぽりかぶっていただきました。

とにかく体を冷やしてはいけないとその場で考えついたものですので、利用者さんも救助されるまで見つかったと思います。みんな無事でよかったです。



「内海」から水が押し寄せた

～初めて見る現象に危機感～

(奄美市 60代 女性)

私はいつもどおり農産物の加工販売所に出勤していました。そこは目の前が内海という塩水湖で、国道沿いに建物がありました。雨がひどくなった午前11時過ぎに加工所に水が上がったので、あわてて階段を数段のぼったところにある販売所へみんなで移動しました。

そこなら安心と思っていたのですが、1時間後ぐらいに内海から国道を越えて塩水が入って来たのです。内海から水が来るなんて見たことがなく、「これは大変なことになるな」と思いました。

それから20分もしないうちに、どんどん水かさが増し、販売所の前のスノコが全部浮いて、ふつうには歩けない状態になりました。

もう自分たちの命が大事ということで、店を閉めて家に帰ることにしました。そうしている間にも店の中に水がどんどん入って来て、やっとの思いで戸を閉めて、裏の高い場所に移動しておいた車に乗って家に帰りました。

あの日、加工所に入った水は2メートルを超えました。まさかそこまで水が来るとは想像もできませんでした。



濁った水、ゴロゴロという音・気づいていた異変

～想像できなかった施設内への濁流～

(奄美市 60代 男性 介護施設職員)

台風の際はバケツをひっくり返すような雨が降りますが、あの日の朝は通常の雨という感じでした。

うちの施設の玄関の入口に掃除用の小さい排水溝があって、そこはちょっと雨が降ると逆流して、ゴボゴボゴボって泉のように湧き出るのですが、その日は噴水のように吹き出していました。

ちょうどデイサービスの方がいらっしゃる午前10時ごろでしたので、これはちょっとまずいなと思って、その上にゴムのマットをかぶせて押さえようとしたのですが、水の勢いが強くて完全には止められませんでした。

施設のすぐそばの川を見に行くと、水が濁り、川底を大きな石が転がっているようなゴロゴロゴロという音が聞こえました。私は15年以上同じところで勤務していますが、川の水が濁ったのを見たのは初めてでした。

そういった異変に気づいていたんです。「この音、なんだろう？」って仲間と話していたんです。でも、まさかその川がはらんし、建物内を濁流が貫通するとは思ってもいませんでした。



もし、私が残っていたら・・・

～できなかった大雨情報の把握～

(奄美市 60代 女性 介護施設職員)

悪夢のような1日でした。施設は認知症の方9人を抱え、そのうちの3人は身体的にも不自由で車いすが必要な方たちでしたが、2人の方が大雨の犠牲になってしまいました。

あの日、私が夜勤明けで家に帰って休んでいると、交代勤務の職員が道路の冠水やがけ崩れで来られなくなったとの連絡が入りました。私は「夕方の5時過ぎには戻るから、利用者さんが不安にならないようにケアをしっかりとってください」と残った2人の職員に頼みました。

その後も連絡を取り続けましたが、昼の食事の最中に一気に水が押しよせたとのことで、職員がそれぞれ命がけで利用者さんの命を守ろうとしましたが、残念な結果となりました。

一番の反省点は、パソコンの前に座るなりして、情報を収集する術をもたなかったことです。もし私が残っていたら大雨の情報を早めにキャッチすることもできたかもしれませんが、交代要員が来られず、1人がおむつのケア、1人が食事のケアをしないといけない状況でしたからね。状況の把握まで手が回らなかったことが残念でたまりません。



急に襲ってきた猛烈な雨

～頭の中が真っ白に～

(奄美市 50代 男性 役場職員)

午前9時半ごろからいつものミーティングを始めてほどなく、正面に座っていた職員が「課長、ちょっと雨がすごい状況になってるじゃないですか」と言うので、振り返って外を見ると、ものすごい大粒の雨が降っていました。急に土砂降りでした。

それから10分、15分するうちに「川がちょっと増水しましたよ」とか、「国道が少し冠水し始めていますよ」というような情報がちょこちょこっと入るようになってきて、窓の外を気にしながら、駐在所とか、保健福祉課とか、施設関係とかと連絡を取り合っていました。

午前10時過ぎごろでしたか、冠水し始めた現場に行ったり来たりしていると、みるみるうちにそこが川になり、濁流になりという状況になりました。

午前11時～12時の間に130ミリ、12時～13時の間に131ミリという猛烈な雨が、この地域全体に襲いかかってきたような感じで、頭の中が真っ白になってしまいました。その日の朝にはまさかこういう状況になるとは思ってもいなかったのです。



かろうじて写した被災写真

～状況を伝えねばとネットで送る～

(奄美市 40代 男性 役場職員)

あの日の朝はいつもどおり役場の支所に出勤しました。特に雨が多い地域なものですから、雨が降り続けているなどは感じていても、さほど気にすることもありませんでした。

午前10時過ぎに立ち往生した車を引き上げる作業に向かう途中、アスファルトが見えないくらい道路が冠水していたため、交通整理にまわることにしました。

午前11時45分ごろには近くの川の水が土手を越えて来るようになり、5分、10分間に水かさが増え上がって来ましたので、近くの診療所の先生たちを支所の2階に避難させるなどしてから、私たちも身の危険を感じて2階に上がることにしました。

それでも、何とか本庁に状況を伝えようと、1階の椅子に上り、デジカメで支所の中に水が入ってくる様子を1枚撮りましたが、それ以降は2階、3階から写すほかありませんでした。水は、2メートル40センチぐらいの高さまで来たのです。

写した写真を3枚、同僚のノートパソコンを借りて、インターネットを通じて本庁に送りました。とにかく携帯電話が不通になってからは外部との連絡も一切とれず、水が引くのをただ待つだけという状況でした。



観光客は車の中に避難

～エコノミー症候群に気を配る～

(奄美市 30代 女性 保健師)

私は避難所となった施設の保健活動を担当したのですが、みなさんどんどん避難して来られて、管理の難しさを痛感させられました。

奄美大島は観光地ですから、避難して来た人の中には行き場を失った観光客の方もいっぱいいました。地元の方は住民基本台帳を活用して、まずどこの誰なのかを把握しました。観光客の皆さんは居づらいのか、ずっと駐車場の車の中にいたので、エコノミー症候群にならないよう気を配りました。

当初、医療活動の応援に来てくれた人たちの窓口的なところがすごく混乱していましたので、途中で窓口を1本化して対応するよう見直しを行いました。

今回の医療活動は、主に地元の診療所の先生に頼っていました。医師団とか日赤さんからいらした先生に診療にあたってもらい、地域の方々の主治医として健康状態を良く知っている地元の先生は、フリーにしておいて、外からいらした先生に情報提供をしてもらったならば、もっとスムーズに医療活動ができたかなと、今では反省しています。



～ 編集後記 ～

一日前プロジェクト、みんなでやってみませんか？

一日前プロジェクトの物語をお読みいただき、いかがでしたでしょうか。皆さんも、難しく考えずに一日前プロジェクトを実施してみませんか？

自然災害に遭遇して体験したことや感じたことなどを語り継ぐことは、災害体験者や被災者の重要な使命であると言えるでしょう。なぜなら、多くの市民は被災経験や災害体験を持たないため、災害に事前に備えることの大切さを頭で理解はしていても、実際に自分が被災したらどうなるかをイメージできず、何も対策を講じていないからです。

災害体験や経験を話したい、語り継ぎたい、語り継がなければならないと思っている方々も、実は大勢いらっしゃいます。その方法が見つからず、語り継ぐこと・発信することがなかなかできないまま、貴重な体験が風化してしまうことが多々ありますが、ここでご紹介する一日前プロジェクトの手法を用いれば、比較的気楽に「語り継ぎ」を実現できます。

一日前プロジェクトでは、被災された方々のさまざまな「思い」や「本音」を物語にして、災害体験・被災体験を持たない人たちに、災害が身近で、恐ろしいものであることに気づいてもらうことを本来の目的としています。今年度も、ジャーナリストの皆さんや地域の防災に携わっている方々と一緒に物語作りを行いました。今後も本プロジェクトを進めるにあたり、新たな担い手が増えることが期待されます。

一日前プロジェクトで作られた物語は、研修やワークショップなどの際に、災害のイメージを膨らますために、導入部として使うこともできます。文字だけでなく、添えられている気の利いたイラストも一緒に使うとより効果的でしょう。テレビニュースの企画で、過去の被災者インタビューの代わりに一日前プロジェクトの物語が使われたこともありますし、ホームページでエピソードを紹介している自治体もあります。

一日前プロジェクトの進め方や活用方法のポイントを以下にまとめましたので、参考にしてください。

※詳しくは、内閣府のホームページ <http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html> をご参照ください

物語を集める

一日前プロジェクトの素材となる物語を集める時のポイントは次のとおりです。

1. 「物語」を拾い出す

(1) 話を聞く

同じ被災体験のある人同士に2~4人集まっていたいで、2時間程度話を聞きます。何らかの共通性がある方々のほうが、互いに思い出して再発見しながら話が進みますので、その過程も丁寧に聞き取りましょう。聞き手は複数で行い、質問して詳しく引き出すより、話が弾むように仕向け、疑問点は最後に確認すれば良いでしょう。最近の出来事だけでなく、時間がたった災害についても振り返って取り上げることもできます。

(2) 物語を見つけ出す

話を聞き終わったら、聞き手同士で手元のメモを確認しながら、災害を体験していない人にも共感を得られる物語になりそうな話を見つけ出します。1回の聞き取りで10話以上の物語ができることもあります。キーワードなどから、仮の見出しを考えておくといいでしょう。ただ、減災や防災行動としてふさわしくない話に気をつけましょう。

(3) 見出しをつけて編集する

テープ起しなどの記録ができあがったら、上記(2)で拾い出した物語の種を、できるだけ語り口を残して編集します。一つの物語ごとに300字から500字程度にまとめると読みやすいでしょう。一つの話から複数の物語に展開することはよくありますので、単純に元の話の切り分けるのではなく、重なっても単独の物語で流れが分かるようにします。

新聞や週刊誌、広告の見出しのように、内容を一言で言い表して興味を持ってもらえるような見出しを考えながら物語をまとめると、いいでしょう。内容を全部説明するような見出しではなく、「どんな話だろう?」と読んでもらえるきっかけになるように工夫しましょう。この見出し付けが、一日前プロジェクトの核とも言えます。

2. 物語を拾い出す場を作る

これまで、一日前プロジェクトのコンセプトを生み出した『災害被害を軽減する国民運動に関する専門調査会』の専門委員を中心に、各地で物語を探る聞き取りを実施してきました。今年度からは、いろんな立場の人が、身近に感じられるような物語を拾い出すために、聞き取りの場をさらに増やそうと、聞き取りの担い手を増やす試みも始めています。

災害列島である日本では、不幸なことに毎年のように災害が発生します。その体験は、同じように見えても、一人一人にとっては厳しい経験です。その過程で辛い思いをした被災した人々の声を、一日前プロジェクトとして継続的に後世に伝えていくために、物語を聞き取る場を作り続けていきましょう。

一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

簡単な手順を紹介します

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

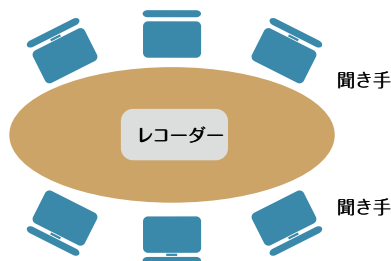
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集 ※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したい
- 日頃から何を準備しておけばよかった

といったお話を聞かせていただき、そこから導き出される教訓や身につまされるお話を小さなエピソードにとりまとめる活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた約800の物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください！きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどご自由にお使いいただけます。

「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。

一日前プロジェクトホームページの活用方法

ダウンロードの方法を以下に示します。地域の勉強会の資料等に取り入れて活用してください。

- 「一日前プロジェクト」で検索 > [一日前プロジェクト - 内閣府 - 防災情報のページ - 内閣府](#) のリンクをクリック！

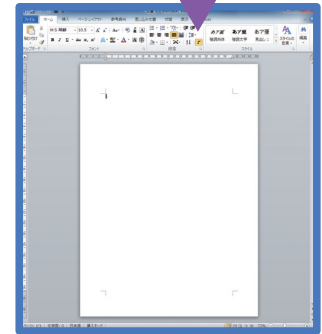
または、

- 内閣府のホームページから
ホーム > 防災 > 教育・啓発 > 災害被害を軽減する国民運動 > 一日前プロジェクト に進み、
「災害の種類」「地域」「場面」から探す > 知りたい災害を選ぶ > 利用したいタイトルを選択

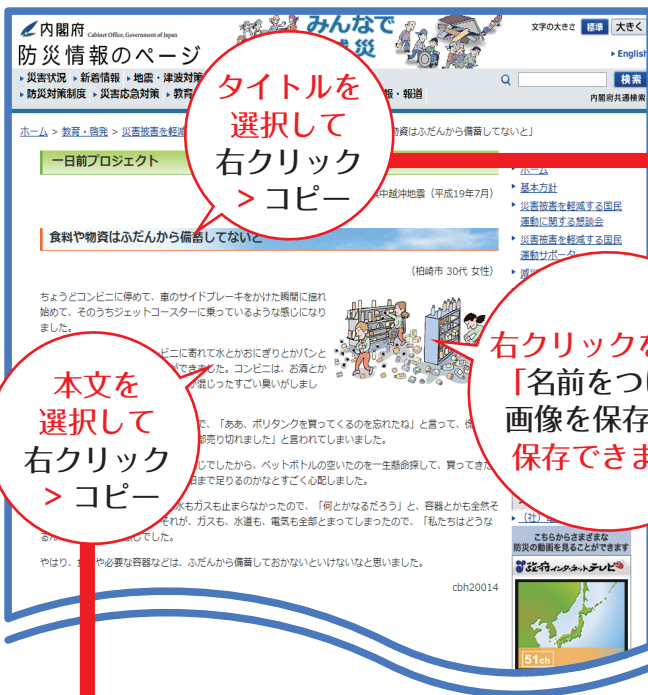


Word2010での作成例

ファイル > 新規作成 をクリック
↓
「白紙の文書」をダブルクリック

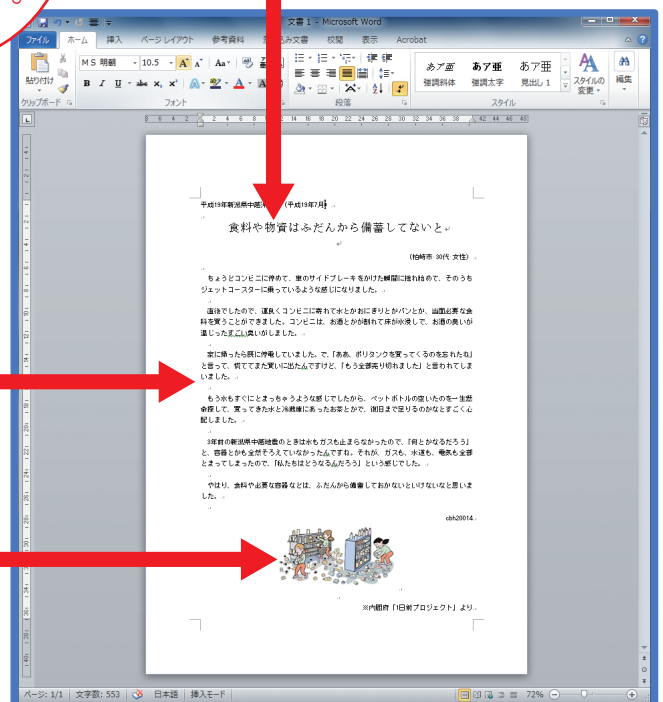


貼り付け



貼り付け

挿入 > 図 からイラストを
保存した場所へ移動し、
保存したファイルを選択
「挿入 (S)」をクリック



※イラストや文字の大きさは変更可。

■発行 内閣府(防災担当)

〒100-8969 東京都千代田区霞が関1-2-2(中央合同庁舎第5号館)
TEL.03-3503-9394 <http://www.bousai.go.jp>